「　『手紙』を読んで思うこと　」

神戸市　松葉萌恵

私は先日、東野圭吾さんの『手紙』を読んだ。

弟、直貴の学費欲しさに盗みに入った家で家人に見つかり、衝動的に強盗殺人を犯してしまった兄。そして、突然『犯罪者の弟』となってしまった直貴。その直貴に対する世間の見方の話である。犯罪には被害者もいれば加害者もいる。そして、それぞれに家族がいる。その加害者の家族にスポットを当てた物語であった。

そのような理由があろうと罪を犯すことはいけない。いくら弟のためであろうと、それは正当化できない。自分が刑務所で償うということだけではなく、家族も苦しみを背負って生きていくということを忘れてはいけない。

犯罪者は獄中で生活する。しかし、その家族は今までと同じ環境の中で生活を続けていかなくてはならないのだ。ニュースで流れ、ワイドショーで騒がれ、周りの目は今までと同じだろうか。物語の中で直貴は、世間から差別を受け、辛い生活を送る。学校、仕事、結婚、友人関係、夢、全てつまずく。現実でもそうなのだと思う。

もしも、私のチカクに犯罪者の家族がいたら、と考えた時に私はどうだろうか。やはり恐ろしく、関わりたくないと思ってしまった。しかし、その家族と本人は別人格である。家族は罪を犯した訳ではないのである。そのことは決して忘れてはいけないのだ。人はそれぞれ人格が違い、それぞれの人そのものを見、つき合っていかなくてはいけないのだ。決して偏見を持ってはいけないのだ。

毎日のように犯罪が繰り返されている。そのどれにもいる被害者、加害者、その家族、親類、友人、同級生、同僚…。すべて人の人生が少なからず変わってしまう。しかし、できるだけ傷つかぬように世の中が交わっていかなくてはいけないと思う。

今の私にできることは、偏見をもってはいけない。好奇の目で見てはいけない。差別をしてはいけない。そして、何より全ての根元である犯罪を犯してはいけないということだ。